



▲中世編発刊記念講演会の様子

歴史は未来の羅針盤

温故知新

『近江日野の歴史』第二巻「中世編」は、第一章「鎌倉・室町時代の日野」、第二章「日野の中世社会と文化」、第三章「戦国時代の日野」、第四章「信長・秀吉時代の日野」からなります。役場・公民館等にて一冊四〇〇〇円で好評発売中です。

『近江日野の歴史』の第四回配本となる「中世編」の発刊を記念して、一月二十三日に日野公民館にて講演会が開催されました。当日は、「中世編」の執筆を担当された河内将芳・下坂守の両氏に講演をいただきました。町民の皆さんにはご多忙のところ、大変多くの方々に参加いただき、ありがとうございました。

「中世編」では、蒲生氏の中世における活躍を縦軸に、蒲生氏を生んだ日野の地域が培った風土や文化を横軸におき、最新の研究成果を踏まえつつ、蒲生氏をはぐくんだ中世の日野の姿を捉えなおす構成となっています。

今回からは、「中世編」の内容について各章ごとに紹介する予定です。まずは、第一章「鎌倉・室町時代の日野」の内容を紹介します。

日野の中世の始まり

第一節「蒲生氏の黎明^{れいめい}」では、鎌倉から南北朝時代にかけての蒲生氏の一族の動向を、残された文書や蒲生氏の系図の検討を通して明らかにしました。これらを通じて、この時期の蒲生一族が日野近辺に多くの分家を持ち、一族として結束をもっていたことを説明しています。

第二節「荘園制の展開」では、

日野町周辺に確認される各種の荘園を分析し、京都の公家や寺社が領主となっている土地が多く存在すること、荘園現地の実務を行う存在として蒲生一族の儀儀^{ぎぎ}氏が大きな役割を果たしていたことなどを明らかにしています。また、こうした荘園の成立と連動して、十二世紀頃の大規模な耕地の開発や中世村落の集村化などの動きが見られたことが、発掘調査の成果や石造品の銘文などによって明らかになりました。

室町時代の蒲生氏

第三節「室町幕府・守護と蒲生氏」では、蒲生氏と室町幕府や守護^{ろうく}六角氏との関係を軸に、蒲生氏が新しい時代に対応して役割を大きく変えてゆく姿を描きました。蒲生氏は、南北朝・室町時代になると、幕府との直接のつながりを次第に求めるようになり、守護六角氏に

対抗しようとしています。こうした立場を押し進めたのが、蒲生貞秀の祖父秀貞^{ひでさだ}でした。残された文書などから、彼は現在の十禅師近辺に活動の基盤を持っていたと考えられます。

第四節「蒲生貞秀の登場」では、十五世紀後半を中心に、蒲生家の当主貞秀の活躍を取り上げました。応仁の乱以降の中央の政治の動き、近江国の情勢のめまぐるしい変化のなかで、貞秀は將軍足利義材^{あしががよしき}（義植^{よしの}）方として行動します。史料に残された蒲生貞秀の姿をたどると、彼が京都の政治情勢の変化にうまく対応しつつ、近江国内で行われた多くの戦いに活躍した様子が見られます。



▲比都佐神社の森と十禅師の集落